
物語は進まない(仮)

モブにもなれない人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語は進まない（仮）

【Nコード】

N2840X

【作者名】

モブにもなれない人

【あらすじ】

幼なじみ、ツンデレ、親友、そして主人公。この四人＋αが織りなす学園での日常！ 今日が変わらず過ごす彼らの前に現れるのは転校生のお嬢様？ トゲトゲした態度、見かけた時とのギャップに気づく主人公は果たして―― 更新不定期です 題名変更しました（これも（仮）です

ここまで

釣り。本当は爽やかな青春なんてありません。どろっどろです。Q・

タグについて ・ ツ理デ仕他（釣りでした） 〓 まったくの嘘。フラグも立ちません、多分。実際はそんなにドロドロなのは作者の力量的に無理なので一話千文字ちよつとで何気ない一場面を切り取ります

十字路で転校生と（）

俺の朝は早い。七時に起きて体にまとわりつく布団を跳ね除ける。口があれば「まだ一緒に寝よーよー」と言ってきそうだがどんな美少女に誘われようと俺は遅刻したくない。故に一瞥すらくれない。昔こそは朝六時に起きるなんて無理だと思っていたがいやはや、俺は慣れやすい体質らしく半年で目覚まし時計のお世話から脱し、偶に危なくなるがおよそ遅刻とは無縁になった。

「あ、お兄ちゃんおはよう！」

「ん、おはよう」

階段を降りてリビングへ出れば一足先に起きて朝食の用意をしていた我が妹の愛奈が可愛らしい笑顔を向けて朝の挨拶。俺はたまにこの妹を疑う。髪の毛の色は俺と同じだ。当然名字も。だがその容姿と言ったらおよそ似つかないもので、いつだったか父母に血は繋がってるのかと本気で聞いた。結果は当然YES。いやはや世界とはわからないものである。

そんな誰にも自慢出来る妹の作ってくれた朝食を無言で食べる。いや頂きますはちゃんとしたが。

敢えて言おう、時間もない朝にだらだらとお喋りしながら食べるのはただのバカだと。

せっかく美少女（と言う名の布団）の誘惑を蹴って降りてきたのにここで時間を浪費するのは愚の骨頂。余裕をもって登校したいのだよ俺は。

ちらちらと話したそうに視線を向ける妹はぶっちゃけ苛つく。苛つくが喧嘩にでも発展すれば悪いのは俺だと一方的に決まり怒られ

る。で、学校まで走るハメになるのは明らかであり、気付かぬフリして無視するのがベターなのだ。
そもそも、

「ごちそうさま、いつもありがとな」
「う、うん！ 明日も作るね！」

こうして感謝の言葉を述べるだけでぱっと笑顔になるから問題は
ない。

明日も作ると言う妹に片手を挙げて返事の代わりにすると、洗面
所で顔と歯を洗って制服に着替えた。

忘れ物はない。前日に念入りに明日必要な教材が入っているか確
かめたからだ。でなければ朝になってあれないこれないなどとなり
かねないのだから。

そして俺は家を出た。のんびり歩いて登校したいから。それだけ。
妹に話しかけられたらいつ切り上げられるかわからないし。

しばらく歩いて二つ目の十字路に差し掛かった時だ。

俺の危機察知能力がけたたましい警鐘を鳴らすと共に、脳が電気
信号を送る前に歩みを止めさせる。交差点を飛び出す直前の俺。

「大変！ 手続きあるから早く来なさいって言われてたのに！」

そいつは俺と同じ制服を身に纏った女だった。あちらさんはどう
やら急いでいるらしく、反射的に止まった俺の目前を猛然と走り去
っていった。見ない顔だったからきつと転校生なのだろう。律儀に
も食パンを口に挟んでいるとまで来た。どうでも良いが手続きは全
て前日までに終わらせるべきだと思う。職務怠慢ダメ、絶対。し
かしその、なんだ。いくら何でも左右確認もせず十字路を走る抜け

るのは非常識ではないだろうか。もし車が出てきたらどうするんだと。

律儀に一時停止をしたドライバーが、気を抜いてさあ行くぞとアクセルペダルを踏んだ途端に神風よろしくマイカーの横っばらに直撃して勝手に後ろへ倒れる。急いでいよいよといまいとドライバーは状況把握兼安否確認のために車を降りねばならず、最低でも数分はその場に拘束されるだろう。

「少女にぶつかりました」

「お前はいつたい何を言っているんだふざけるな」

例えば遅刻したら上記のようなやりとりが行われるに違いない。たった数分、されど数分。上司の信頼どころか職すら失いかねない。もつとも、時と場合によるIfの話ではあるが。

今回は俺が立ち止まったから良かったものの、これがもし俺以外の人間だしたら間違はなくぶつかって互いに尻餅をついたに違いない。ぶつかった方はそれだけで済むがぶつかられた方はたまったものじゃない。身長にもよるが頬か、制服の肩辺りにパンが挟まれるのだ。

バター、マーガリン、ジャム。いずれにせよパン屑と共にべったりと付着することとなり、後日のクリーニングは必死。いや本当に居合わせたのが俺で良かった。俺は誰かを救ったのだ。

ここまで考えて、内容がもつともだのもしだのと無駄な事ばかりだったのだから仕方ない。しかも俺は立ち止まったままだった。畜生、早く出た意味がなかった。死ねばいいのに。

教室にて会話（）

結局、朝のHR開始時間の十分前に着くと言う大惨事となった。
いや、普通なら問題はないのだ。ただ、ちよつと問題があるだけで

「よう、いつもならとっくに来て寝てるのにな」

その問題の一部がこいつだ。表面はまったく普通。テストはそこ
その点だし喧嘩は強いし帰宅部。どこぞの金持ちつて訳でもない。
見事に普通かやや突出しただけみたいな感じ。髪色も黒、顔もやや
格好良いくらい。

入学時、つまり一年前から同じクラスで馴れ初めは向こうからで
なく俺から声をかけたのが始まりだ。

ザ・普通を目指していた俺は波風立たずに過ごせそうな奴とお近
付きになりたくて、話しかけた。だが蓋を開けてみれば急に真面目
腐って説教紛いな事を言うし、何より厄介ごとに率先して巻き込む。
今まで何度こいつに殺意を覚えたか定かではない。数えるのが途中
から面倒くさくなった。

「それより今日、このクラスに転校生が来るって知ってるか？」

俺は絶望した。

「しかも女の子！ 職員室行っただけで滅茶可愛かった！」

だから何だと言いたい。それより俺は遅れたノストラなんちゃら
の予言を見ているんだ。

転校生、とかもしかしくなくても朝のアイツだろう。どこか常識が
欠落しているような奴。ぶつかっていたら「あ！ 朝のヤツ！」と

か言って自己紹介を促す担任をガン無視して指を向けてきたに違いない。俺はクラスの注目の的になり、知らない奴から話しかけられる。マジ勘弁。

まあ朝にもやったがこれはたればの話だから問題はない。ただ、そう、ただ不幸な点を申し上げるとするならば俺は一番窓側の再後尾とお昼寝に最適な位置へ居を構えており、その右側が空席になっている、と言う事実があったことが。

「早めに来たかいがあつたつてもんよ！」

対象的だ。俺は核シェルターにでも避難したいのにコイツは戦車の前に笑顔で立ち塞がっている。と言うかお前今日は早く来たのかどちらにせよ絡まれてたのなら遅くなつて俺は良かったらしい。十字路で見た女に今は感謝しか浮かばない。

何？ 現金な奴だつて？

人間は皆そんなもんだろう。嫌な事が回避乃至軽減出来て俺は嬉しくて仕方がない。結局、残り数分は打ち拉がれた俺に一方的に友人が喋っていた。

【会話】

会話とは二人もしくはそれ以上の主体が、主として言語の発声・手話・ジェスチャーなどによる意思表示によつて共通の話題をやりとりするコミュニケーションや、あるいは話をする行為全般（内容・様式など）のこと。

正面のコイツが喋っている間に携帯を開いてwikipediaで「会話」の意味を思わず調べた。話題をやりとりしてねーし。

言つまでもなく俺は人間だ。喜怒哀楽あるし腹減れば喉も乾く。思考能力だつてある。

だのにコイツは人形に話しかけるみたいに言葉を連射してくる。まるで元より返事はいらぬ、返つてこないのは当たり前なんだとでも言っているかのように。

そうなるとさしもの俺も怒りが沸いてくる。沸いてくるけど何もしない。だって勝てねえし。負けると解つて突っ込むのはバカのことだ。怪我＋教師の説教＋成績－とデメリットだらけ。

だから俺は黙ることにした。ついでに以後は自分の中でだけ暴投手と言ふあだ名で呼ぶことに。言葉のキャッチボール云々をなぞつただけだ。

担任が入ってきた。さあHRの始まりだ。……凄く逃げたい。

転校生と（）

「今日は皆さんに新しいお友達を紹介します」

しなくて良い。高校生に向けて小学生相手に言うような言葉遣いは止めて頂きたい。

もちろん周囲はそんな細事など構わずに大はしゃぎ。あまつさえ転校生の性別すら聞く始末。

あのさ、お前等何歳だよ。ゆとりだろうとなんだだろうと一応は高等教育受けてんだから落ち着きつてもんを覚えろと。社会に出た時にそんなんじゃ即首切られるぞ。少なくとも俺は切る。

新入社員が入ってくる度に落ち着きを無くして驚喜乱舞されても迷惑なだけだろうが。だってそうだろう？ 緊張している自分を置いて勤務時間に馬鹿騒ぎとか、死ねって思う。

これが歓迎会とかだったら何も言わない。そう言う場だからだ。

つまり騒ぐなら時と場所をしつかり弁えろってこった。その点俺は落ち着き払っていた。どうせ口クでもないとわかっていたから。事前にわかってるか否かは相当大事。

ちなみに転校生はどこぞの大手メーカーの社長の娘らしい。だからどうした。

そして当然、ソイツは俺の横になった。ちらと視線を向ければ長い髪を頭の後ろで纏め、腰まで一本に伸びている。それなら良いがリボンが真っ黒。何となく発症してるかと思ってしまう。

「どうせ貴方も皆と同じでしょ」

意味がわからない。よろしくと一言言ったら突然喋りだした。日本語でおい。

親しい仲の奴ならともかく初めて言葉を交わした奴に皆と同じとか思考を疑った。

あ、いや少なくとも目の前の奴とは違う。きちんと人の話は聞かやっぱりこいつは碌な奴じゃあなかった。しかもアタクシカワイソ一な雰囲気隠そうともしない。

あのな、俺はお前の過去なんざ心底どうでもいいんだよ。十中八九聞いてほしただけの構ってちゃん。そんなのは俺の前に座る暴投手に任せてろ。たまたま隣になった奴の厄介事に巻き込まれてたまるかよと。

「そんなこと言わずに楽しくやろうぜ！」

ふあつきん。マジに暴投手が首突っ込みやがった。ギロチンがあったらそのまま落としたい。切実に思った。

「貴方には言ってないわ。良いこと教えてあげる。お金目当てに近づいてきたのは貴方みたいなタイプが一番多いの」

ああ、暴投手だ。何故か勝ち誇ったかの暴投手を見てるけどお前も同類だからな。聞かれてもいないことをペラペラ喋って、お前は口にチャックをつけるべきだ。

本当に、俺のクラスには碌な奴がいない。

「んなことねーって！ お前もそう思うだろ？」

こつちに話題振るな死ね。

「まあ、金以前にお前自身に興味がない。名前、なんつったっけ？」

俺は逆転された九回裏を守るような馬鹿ではない。しょうがないので心優しく言っただけのことにする。

俺マジ寛大。勝手に人格決めつけられて一方的に喋られたのに。敬え。

名前覚えてないのは事実だ。憂鬱過ぎて聞いてない。

「わたりーもうスイーツでいいや。」……は？」

しまった。末代まで語り継がれる不覚。けどまあ良いだろう。別に死にやしない。この明らかな悲劇のヒロイン気取りはスイーツで良いだろう。あたしは死んだ（笑）

そんなスイーツは俺に怪訝な視線を送るが素知らぬフリを突き通し事なきを得た。ぶっちゃけコイツの対処に体力を割くと後が大変だから。

私語を慎まない俺らに担任は構わない。我関せず、実に強かで賢い。彼は伝えるべき事をさっさと伝えたとHRを終わらせ姿を眩ます。職員室でデスクワークでもするのだろうか。

「おっはよー！ です！」

「まったく、せめて声量ぐらい抑えなさいよ……」

やってきてしまった。この時が。

幼なじみとクラスメイトと

俺はおそろおそろその声の主へと愛想笑いを浮かべる。

「今日は迎えに行けなくてごめんね？」

「いや、気にしないでいいよ」

まず最初。やけに声にメリハリをつけて喋るのは俺の幼なじみだ。呪われたかのように学校、クラス、果ては班まで同じだった。今は班などないから同じクラスまでに留まっている。羨ましいと思った奴は人生やり直せ。

俺がコイツに疑問を持ったのは中学に入ってからだと思う。紫色なのだ。髪の毛が。本人曰く地毛。更に恐ろしいのは周囲どこるか教師陣まで何も言わなかったこと。不良の茶髪を注意してコイツを初対面でもスルーした時はマジで世界の理が歪んだかと思った。

挙げ句中学の間は毎朝家に押し掛け、それだけならまだしも俺の部屋に不法侵入しのしかるなどと言うあるまじき行動を見せてくれた。以来、コイツは密かに金魚のフンと呼んでいる。

「良かったわね、可愛い女の子が隣で」

「知り合いつてんならお前の方が気が楽だけど」

その横は↑こんな髪型した金髪女。金髪は外国で良くある話だから金魚のフンに比べたら遙かに一般的である。少なくとも「地毛です」がまかり通る域。

見た目はどこぞのお嬢様、その実はちょっと豊かな家にいる可憐な少女。ただ一つ、容姿をかつ飛ばすのがその性格の酷さだ。

「な、隣が良いなんてこんなところで言うんじゃないわよ！ 私の方が願ひ下げよ！」

で、でもどうしても言うなら…… なってあげないこともないわ！」

——このように、回路が複雑に絡み合ってエラーを起こしている。

あのな、たればの話をしてたのにどうして俺がお前の隣が良いなんて言っ たって話になっ てんのか。お前は日↓英↓日と再翻訳された文章か。

そして自己完結して常に上から仕方無しと言わんばかりに声を小さくする。やっぱり断固反対。スイーツの方がまだマシだ。呆れて何も言う気力の無くなっ た俺は再びスイーツを一瞥。

うわっ不機嫌そう……

「転校生だー！ よろしくね！」

「バカ二人は放って置いて私たちと話さない？」

駄目だコイツ等早く何とかしないと。

不機嫌そうなスイーツに満面の笑みを浮かべて話しかける金魚のフンと金髪。否、会話ですらなかった。

構わないでオーラ全開のスイーツをまったく無視して話しかけているのだ。当然、顔つきは次第に険しくなっ ていく。いと哀れなり。

「いい加減にして」

机を激しく叩く音が響く。周囲の野次馬達は何事かとこちらへ振り向く。あーあ。

一方二人は、意外なことに吃驚していた。“何で怒ってるの？”とでも言いたげ。いや自覚無しかよ。

「何だよ感じ悪いな……」

「私、何か悪いことしちゃったかな……」

「アンタは悪くないわ。何もね」

本当に脳が腐ってるか精神がオカシイと思う。今なら黄色い救急車なんて都市伝説も信じられそうだ。

周囲が金魚のフン達に同調していることがより一層その考えに拍車をかけた。

初対面だぞ？ よろしくと言った金魚のフンはまだしも金髪は勝手にトークを開始しやがった。ちなみにお互い名乗っていない。自己紹介しろよ。

どうせまたぞろ「早くクラスに馴染めるように」と行動したのだろうかはつきり言っただきなお世話だろ。

馴染める奴は馴染める、馴染めない奴は馴染めない。

どうせ一月もすればそうなるのだから、大きくて余計なお世話はその後にはすばいいのだ。

初日から馴染めるのは性格も無難なイケメンと美少女だけである。性格とコミュニケーション能力が欠如しているスイーツにそれを求めるのは酷を通り越して鬼畜だ。

普通の主人公なら偽善者ぶって何かを言っただけから探しに行くのが生憎と俺は違う。

そりゃ、いや悪いのはお前等だろと言いたいのが今日出会った奴のために己の立場を危うくするつもりはない。異端は排除される、古来からの習わしだ。

あーあ、ご愁傷様スイーツ。

談笑している三人に加わらず、窓の外へ視線をやった俺は同情した。

三分でわかるキャラ説明○

一応メインは出そろったのでキャラの簡易説明
だつて名前決めてないし

・主人公

危機察知能力が高い
常識を逸脱した人たちに囲まれている
暴投手に色々巻き込まれたらしく不憫

・愛奈

現時点で唯一名前が出てる
主人公の妹。三つ下
あまりに似てないために実の兄から血の繋がりを疑われた

・暴投手

会話はほとんど一方通行。どこに投げてんのレベル
厄介事大スキー。主人公を巻き込む
偽善の押しつけなら金魚のフンに負けていない

・金魚のフン

髪色が紫と擁護出来ない。でも可愛い
偽善の押しつけが酷い。とにかく転校生とか馴染めるようにと行動
する。良い迷惑
やたらとエクスクラメーションマークがつく

・金髪

ツンデレ。黄色い救急車が一番必要なキャラ
頭がどうにかなくなっちゃってすぐに怒る。すぐに手を出す。理不尽

もうどうしようもない末期

・スイーツ

転校生。構ってちゃん

クールっぽいけど現実にはパンくわえて確認もせず十字路飛び出す
非常識人

黒いリボンと教室での態度からアレの発症を疑われている

昼休み、弁当と〇

死にたい。

恐らく今の俺の大部分を占める思いだと思う。

時刻は昼、朝の一件以来別段変わったこともなく――いやそれが普通のだが、とにかく平穩に過ごせた。

敢えてあるとしたならばスイーツが一限目の教科書を忘れていて、見せろと言ってきたことが。

いきなり、親しくもない奴に見せるなんて傲慢すぎて気分を害したので自業自得だと返して無視してやった、ざまあ。

前日に用意をして確認を済ませりや忘れることもない、と言うかその一角だけ小学校よろしく机くつつけてお勉強なんて羞恥プレイやりたくもなかった。

そして冒頭へ。

まずやらかしたのが暴投手。朝の一件でクラス内での評価が下がったスイーツに真っ先に話しかけたのだ。

「一緒に昼飯食おうぜ！」

これを聞いた瞬間、俺は逃げようとした。次にお呼びがかかるのはどう見たって俺、さっさと妹の作った弁当を持って席を立ったのだが

「この方が一緒なら、是非お願いします」

「だってよ、一緒に食うよな！」

スイーツに袖を捕まれ、そのまま宣われた。そして有無を言わせ

ない暴投手の圧力。

手にアサルトライフルがあつて人殺しが認められていたら間違はなくこの二人を蜂の巣にしていたと思う。しかる後にTNT爆薬で塵にするはず。

が現実とは非常なもので、どうにかする力も考えもない俺は一人ため息を吐くと仕方無しに椅子へ己の体を埋めた。

つまり、俺は諦めた。

その後、見計らったかのように現れた金髪と金魚のフンも加わつて仲良し五人組みたいな構図になった。本当に死にたい。

厨二病とか誤解されても良い、これだけは俺の名誉のために言わせてくれ。

俺はコイツ等とは違う。「前の学校つて結構良いとこだったんだねー！」

「別にそうでもない。むしろ私に取り入るうとか、邪な思考の持ち主ばかり」

「苦労してたのねアンタ……」

ところで疑問なんだが朝の険悪な雰囲気はどこ行つたんだ？

スイーツは朝のことを悪く思ってるのか気まずそうに反応してる。これはまだ良い。

だが感じ悪いとか言つてた暴投手や元凶の金魚のフン達が笑顔を向けているのは違和感を覚える。相手の気持ちを考えてるのか？

せめて一日置けよと。何か事情があるらしいから落ち着くのを待てよと。

「お、唐揚げ頂きっ！」

思慮に耽り、口を閉じていた俺に何か思うところでもあったのか

暴投手がおかずを盗んで食べやがった。

たかが唐揚げ一つで大きく反応するのも馬鹿らしいので購買で買ったらしいたつぷりチョコパン（120円）を両手で押し潰してやった。

軽い音と共に包装してるビニールが破れ、耐えきれなくなったチョコがあちこちから生地を破ってはみ出している。グロ注意。

「俺のチョコパンがあー！」

「はん、良い気味じゃない」

今ばかりは金髪に同意しよう。

暴投手の悲鳴を聞きながら俺は満足気に卵焼きを噛むのであった。

些細な理由で家出（一）

閑静な住宅街、社会に出れば七割は使われずに忘れるであろう知識を埋める授業を六時間分消費した俺はやっと帰途についていた。途中で不良に絡まれて抵抗している少女がいたが素知らぬフリをした。

ああ言った手合いから女を助けるのは暴投手みたいな奴がやることだ。世渡りに必死な俺には力不足。それに目を付けられても困る。

薄情？ 日和見？ 臆病者？

結構結構、背伸びして生活を脅かされるなんて溜まったもんじゃない。しかも赤の他人のために、だ。

恋人とか親友のためならまだしも言葉一つ交わした事もない奴はちょっと……。

「たーだいまっ」と

どうせ誰もいないのに、答えなど返って来ないのについこぼす。もはや習慣みたいなものである。何というか、開けるなど言われたら開けたくなくなるような感じ。ちょっと違うか。

「おかえりー」

ほらどうせ返ってきた……いやちょっと待ってくれ。

「あー、うん、話を、聞こうか」
「てへっ」

てへっじゃねー。

致し方無く俺は携帯を取り出し、ボタンを三回押す。いち、いち、まる。110番。

人を取り締まる人にして国家のために働く愛国者達。彼らは人を守るためなら銃だって使ってみせる。

彼らを呼び出せば目の前にいる金魚のフンも三十分で掃除もとい連行されるだろう。

しかし後一步、最後の発信ボタンを押す直前でくだんのフンによって制止されてしまった。

わー！ わー！ と叫びながら必死に携帯をもぎ取る姿はぶつちやけ下手なホラー映画よりも怖かった。そんなに我が身が可愛いなら許可を貰ってから入ってほしい。

「改めて聞くけど何の用？」

「家出してきちゃった」

俺は今度こそ通話ボタンを押した。

もちろん、相手は金魚のフンの自宅だったが。

「不機嫌ー！」

そりゃそうだ。誰だって自分の空間を壊されたら不快に思うだろう。オマケに不法侵入と来た。警察に突き出してやらないだけマシだと思っしてほしい。

金魚のフンはしばらく駄々をこねていたがことごとくを黙殺乃至視界に入れない事に飽きたのか一人テレビを見始めた。

――結局、彼女の父母から得た返事は一日だけ好きにさせてや
ってほしいとのこと。

将来のこととかで少々揉めたらしく、勢いに任せて出たとか。い
やあの、巻き込まないでください。

勿論そんなことは言えず、まあ幼なじみだしと無理矢理に自分を
納得させた俺は渋々了承した。どうせ妹は喜々とするだけだし。

あーもう、普段はウザったく思うけどどうも許してしまうのは俺
がお人好しだからなのか、はたまた――いや、こっ恥ずかしいか
ら以下略。「ねえねえ！ 部屋にエロ本あったー！」
「てめっ何見つけてんだよ！ 戻してこいやあ！」

……許せないこともこの世の中にはある。

妹が帰ってきたのは三十分後、その間金魚のフンはドアの前で延
々と中に入れてくださいと嘆願していた。

帰ってきた妹は状況判断にしばし時間を費やしたらしいが俺が悪
いと決めて説教開始。

ご近所様では今日の様相を見て井戸端会議で俺の評価を最低まで
下げることだろう。

だが反省も後悔もしない。悪いのは金魚のフンだからってのもあ
るが、そもそもそこいらの適齢期過ぎたババア共にどう思われよう
と俺は一向にかまわないし。

あと、エロ本のジャンルは聞かないでくれ。後生の頼みだ。

一つ屋根の下（）

「お兄ちゃんは女心がわかってない」

いきなり妹にそんなことを言われた夕食後。確か、急遽泊まることになった金魚のフンをどこで寝かせるか、と言う議題だった気がする。

俺は布団でも引つ張りだしてリビングに寝かせりゃ良いと言ったのだがその途端にこの発言。何も間違つてなくね？

いや、普通に招いた客ならわかる。エロ本がまた蒸し返されるのを覚悟で自分の部屋も貸し出そうではないか。

だが金魚のフンは？

こいつは親との些細な喧嘩で反抗の古典的な手段、家出を選んで勝手に上がり込んできたのだ。

こいつのご両親が好きにさせてやれと言うからしかたなく一宿一飯を提供してやっただけで、感謝こそすれ詰られる理由なんてミク口もない。ましてや相手が実妹だと言うからおかしな話だ。

「女の子は繊細なんだよ？」

金魚のフンに限ってそりゃねーよ。あいつは幼なじみを巻き込む図太さがある。

「お兄ちゃんって空気読めないとか、たまに言われるでしょ」

ほっとけ。

とりあえず、じゃあ一緒に部屋で良くね？　なんて提案したら二人揃って顔を赤くして、何か言いたげにするが俺は知らん。

ぶっちゃけ今更金魚のフンと同じ部屋で寝ようと何か起きるとは思えない。それこそ物心ついた時から常に一緒にいる、下手したら父母より長い時間を共にした仲だ。天変地異が起きても間違いは起きない。

と言うか面倒くさいしそれでいいよね、ベッドと勉強机があるけど布団敷けない程狭くはない。リビングで寝るのだけは阻止。

「でも……いいの？」

「お前だからな、安心して寝れる」

よもや寝首はかかれまい。

なんとなく嫌だと言いやがったために信頼の証なんだーとか昔は一緒に寝ただろーとか返してやったら不承不承と言った風に頬を小さく膨らませ、盛大に息を吐くと了承してくれた。ちよる甘だぜ。

ただ、転がり込んで来たんだから選択権はないと思うんだが、なんとなく言うのは止めた。また愛奈に何か言われそうだったしな。

寝床の問題も解決した、夕食も終えた、風呂も二人はとつくと入ってる。

やることが、ない。

「昔のお兄ちゃんって、どんなだったの？」

ゲーム機もあるのだが女子がやるゲームなんて一本も無かったしテレビもこれと言ったものはやってない。であるからして当然雑談へと方向は決定し、そして昔の俺を良くしる幼なじみがいるとなれば妹が俺を話題にしない訳が無く。

「昔の俺なんてロクなものじゃなかったような」

「へへー、さては照れてるな？」

照れてません。ぶつきらぼくに呟く俺を金魚のフンは口角上げてつつく。いやマジで碌なもんじゃないです。若さ故の過ち、黒歴史の塊。わかる人が聞けばあいたたたー、な過去。

主に目の前にいる金魚のフン（コイツ）関連で。

「『おまえはおれのおよめさんになるんだよ！』だっけ？」

やめてくれないか、人の傷にハバネロを塗りたくった挙げ句ぐりぐり抉るのは。

そう、一番の汚点は俺の嫁発言だ。まともに育ってくれたなら恥ずかしいから止める、で済んだ。他の思い出も急速劣化することもなかっただろう。

だがコイツは現代でも珍しい馬鹿だ。

暴投手と並んで言いたいことはハッキリ言っし空気を読まない。イジメがあればなんとかしようと駆け回り、コイツに構われていると見えないところでエスカレート。口止めされて何も言えない虐められっこを更に心配してと悪循環。結局暴投手と金髪、ついでに俺も出てきてやっとな解決。原因の一端はお前にもあると注意してしょんぼりしてたから反省したかと思えば翌日には男子が日直サボつてると茶々を入れやがる。今回だっていらぬお世話を転校生にやいたまったく、付き合わされる俺の身にもなってほしい。

もっとも、何より恐ろしいのはコイツがクラス内外問わず嫌われてないってことか。

可愛い正義なのか。そんなのは漫画やアニメでの世界のお話だからどうか目を覚まして欲しい。

記憶は月日を重ねて色あせると言うけれど、とんでもない。劣化によつて剥がれ落ちるのならそれは黒歴史なんて言わないのだ。まったく取れることのない色、何物にも染まらず、ただ暗然とそこに在る。

黒歴史。

きゃっきゃつと騒ぐ二人組を後目に、柔らかな布団がこつちへおいでと誘惑してくる。

誰かさんのせいで精神的な疲れも被っていた俺はそれを跳ね退ける力もなく。ただ疲れたとだけ言つて早々に意識をシャットアウトすることにした。

勿論、二人から猛烈な反発があつたのは言うまでもない。他人をちよつとはいたわつてほしいものである。

後日談（）

俺は今不機嫌の極みにあつた。

現在位置は自宅より徒歩数分、金魚のフン邸。そのリビング。眼前には優しげで、しかし父親としての尊厳を併せ持つ親と、一方吹き出しをつけるならば「あらあら」の四文字が一番似合いそうなおっとりとした母親。

既にわかるだろうが彼らは金魚のフンのご両親である。そこに、何故か俺もいた。場違いにも程がある。

事の発端は今朝である。

珍しく俺の母が早起きをして、折角だから偶には起こしてやろうといらぬ思考を浮かべたらしく不寐にもノック無しでマイルームの扉を勢い良く開けた。

だが俺の身体には前にも言った通り体内目覚まし時計なるものが存在しており、そんなことされなくても既に意識は半覚醒状態だった。これだけならばなんら問題はないだろう。ああおはようぐらいの挨拶をするだけだ。

「あんた……」

「ん……？」

呆然とする母、事態の呑み込めない俺。寝ぼけ眼擦つて母親の視線を辿れば――ああなるほど、確かに言葉を失うわな。

俺は確かに言ったよ。一緒の部屋で寝れば良いじゃないかと。

だが断じて同じ布団で寝ようとは言っていない。しかもよれよれの薄着は俺のシャツじゃねーかふざけるな。人のシャツを無断拝借するとはどんな了見してやがる。

そして再び突っ込みたいのはやはり何故同じ布団で寝ているかとのことなのだが、その余裕はない。俺の母親がこの光景を目撃したと言う事はつまり

「もしもし？ あかねえウチの子がそっちの子と出来ちゃったの！」

この幸せそうに頬を緩めて寝ている方の親にも状況が知られると言うこと。ファッキン、止める瞬間すらなかった。

まるで神業。呆然状態から立ち直り神速で電話をかけて興奮気味にねつ造した事実を報告する、懲戒免職ものの流れる動作であった。ふざけるな。

だが生憎と処分を下す人間はいない。母親こそが我が家の最高権力者であり、一番上の者が何をしようと罰せられることはない。

だから俺はこう言おう。アニメやラノベに出てくる主人公の気持ちかわかる気がする。なるほど、口癖にはなるわなあ。

「ああ、憂鬱だ……」

ってね。

さて、話は冒頭に戻り家に帰りたいと切に願っている状態。こうなってから既に数分が経過、俺の我慢も限界になりつつある。しかし先方は行動を起こす気配もなく、チキンハートな俺は言葉にすることなく密かに毒を吐く。ちなみに母親の方は実に話の通じる人だ。偶に浮かぶ、申しわけなさそうな顔が非常に俺の心を抉る。しかし父親は駄目だ。何も言わしてくれない。金魚のフンはこちらを遺伝してしまっただ。嗚呼、口惜しや。

「あの……」

「黙れエロ猿、人の娘を食べおって」

「お、お父さん！？先に寝ちゃってたから何も無かったから！」

「ウチの娘は何の魅力も無いと言っのか！」

エロ猿と言った後に何もしてないと聞いてまた怒る。俺に一体何を望んでいるんだ。話を聞かないとは先も言った通り、更に付け加えるのならば事娘に関しては主張が一貫しない場合がある。こちらを見て困ったように顔を歪める常識人の母親がいたたまれない。

「ま……魅力的、ではありませんね」

「そっだろっそっだろっ！」

「ち、ちよっと言言ってるのかな！？」

俺がぼそりと言った途端、首を縦に振る父親と笑顔を咲かせる母親。金魚のフンは頬を染めるが、機嫌を良くした金魚のフンの父親が愛娘の過去を誇張しながら話出したため、しばらくはそのままになるだろう。

それから約半時間に渡り話は続き、熟れたトマトもかくあらんぐらいに赤くなつた金魚のフンをよそにホクホク顔の父親が解散宣言をしたために今日は帰ることにした。

……あれ、何で呼ばれたんだろう。まあ金魚のフンの過去話が聞けたのだから来た意味は辛うじてあったのだが。

宿題複写○

突然だが俺は結構にお人好しなんじゃないかと思うことが多々ある。

例えば老人や妊婦にに率先して席を譲ったり。

例えば最後の一つを同時に手に取った時は相手の人に譲ったり。

例えばやる人が本当に誰もいなかったらしょうがないなと人柱になったり。

例えば俺の発言を勝手に解釈して何故か怒鳴られたり殴られたりしても怒らず友達続けたり。

例えば不法侵入されても警察に通報せず話を聞いたり。

例えば――

「宿題写さしてくれ！ 頼む！」

「だが断る」

課された物を自分で始末せず他人に頼って片づけようなどと軟弱な精神をお持ちの級友をつつ跳ねたりとか。

こいつの未来を思っただけでもないがバツサリ切る俺のなんと優しいことか。自分の未来すら不安だと言うのに、慈愛に満ちすぎて自分が怖い。

「なんでだよ！？」

「当たり前だろ。普通断るって」

「え？」

「え？」

愕然とする暴投手から視線を手中の本に移し、取り付く島も与えんとする。しかしこいつの意外そうな一言に思わず顔を上げて真顔で同じ一文字を発する。

いや待て、何故そこで写させて貰えて当然みたいな顔するのだろうか。課題はやってこない奴が悪い。丸写しなんて小学生で卒業すべきものだ。大学に行けばレポートは勿論、卒業する時に論文だつて書くだろう。それは誰からも写させて貰えないのだから、今のうちに慣れるべしだ。いざと言う時に書く技量がありませんでしたじやあ洒落にならん。

「俺ら友達だろ！？ 頼むよ！ 単位がヤバいんだって！」
「だっ、ひつつくな！」

敵は必死らしい。と言うかヤバいなら何故やらなかったのか。単位ヤバイとわかってるのに書かないとか救いようがない。そのまま落第しろ、してしまえ。その方が自分のためだ。って言うか鬱陶しいんだよ！

最初は弱めに抵抗したが離れないのでしかたなく本を閉じてため息。

「お、お？ 写さしてくれるのか？」
「しばらく悶えてろ……！」

そのコンマ数秒後。ゴッ！ と言う鈍い音と共に暴投手の頭に本が振り降ろされる。それは紙の裁き。紙一枚では人肌切れども鈍器にはならぬが、紙の集合体である本類ならば人肌は切れねども鈍器にはなり得る。

ちなみに表紙とか側面ではなく角を叩きつけておいた。おそらく暴投手は耐えようのない苦痛に襲われているだろう。

「――！　っ！？」

ほら見ろ、痛すぎて呻くことすら出来ない。先のしっこさも一発で消えてしまったではないか。

わりとどうでも良いが世界にはファイルを使って敵の足を掬い、転ばせるなんて事をする奴がいるらしい。しっかり立っている人間をプラスチック製のファイルでスパーンと。どんだけ力あるんだよって言う。

閉話休題。暴投手を黙らせた俺はその哀れな姿にこうはなりたくないな、と思いつつもさあ邪魔されずに続きを読むぞーと本を開こうとして

「……目印入れ忘れた氏にたい」

読んでいたページの端を折るのを忘れたためにどこまで読んだかわからない状態に陥ってしまった。別に己の記憶を頼りにすればすぐ見つかるのだが。

だが死ね。氏ねじゃなく死ね。

余計な手間と言うのは人間誰だっけかたたくない。例えば諺ならともかく実際に石橋を叩いて渡れなんて言われたら顔をしかめるだろう。お前さえいなければ俺は余計な手間をかけずに、そも本を閉じて鈍器にして殴るなんて労力を消費せずに済んだのだ。ああ憂鬱だ。眠たい。

そのせいか瞬間的に読む気の失せた俺は机へつつぷすことにした。先生が来たら目の前にうずくまってるコイツが起こしてくれるだろ

うし。おやすみマイブック。

親友と転校生と（一）

俺はこの日違和感を覚えていた。大した事じゃない、厄介ごとの気配はどこぞのノーコンピッチャーのせいでやや粗いながらもついてしまったがそれが反応した訳じゃあない。

敢えて言うなら隣のスイーツが何も問題を起こしてない事におかしいと思っていたのだが、それもまた“別”の話だ。だってフラグ以前にそのルート分岐すら潰したんだから、物語が進むわけがない。

あー、なんかもやもやする。喉に小骨がつつかえてるとか、言いたい単語が出かかってるのに出ないとかに似ててイライラする。

「アンタは何か聞いてない？」

「ん？ 何かって何がだ？」

ふと声をかけてくる人物がいたから視線を若干上向ければ、髪色はともかく髪型が現代で珍しい黄色い救急車が必要な女生徒、金髪が佇んでいた。

しかし質問の意図がわからない。何か聞いた、とは一体何のことなのか。主語が無ければ俺は答えることが出来ないと言うのに。普通なので俺はわかりません。

「いや、だってアイツがアンタほったらかして一週間じゃない」

アイツ？ 金髪の言うアイツが誰なのかわからず、本能的に金髪の視線の先を向ければ――

「……それだ！」

「きゃっ！ な、何よ急に！」

わかった、今やっとわかった。そうだよ、“厄介ごとの予感がしなかったから”俺は違和感を覚えたんだ。

と言うのも暴投手はその体質を発揮しだしてからはすさまじく、約一週間に一回は何か俺を巻き込む。ほとんどは些細な事だが、極稀に暴投手の女友達が彼氏と別れたいから新しい恋人役をやってくれたとか、ストーカーになりかけてる男がいるからちょっと矯正しようぜだとか、下手こけば更に面倒事になるお話を持つてくるから大変だ。

だが今日はその一週間目。別にこれだけならたまにはこれくらいあんだろつと俺は何も思わなかった。

ただ、厄介ごとを持ってこないどころか単語を並べ立てて指切り射撃の様に俺に構ってくる暴投手が一週間、言い換えれば七日も俺に言葉をかけないと言うのはおかしい話と考えて当然の事象である。

「……宿題写さしてくれってうるさかったから本の角で叩いただけなんだけどな」

ちなみにあの後、彼は他の友人に頼んで写さして貰っているから放課後授業を受けることは無かった。周りは甘い奴ばかり、だからこそ俺は厳しくしなければならんだ。

それを聞いた金髪は顔に皺を作ってアンタバカ？ とどこぞのパイロットっぽい事を言い放って自席に戻っていった。意味わからん。とは言え、必要に精神が削られる訳でもないし俺としては万々歳である。一週間前と言えばほら、丁度隣のスイーツと一緒に登校しだしたのもその頃だ。誰がって？ 暴投手がだよ。

………うわぁ。いやいや待て、そんな馬鹿な事はないだろう。そも俺はスイーツの家がどこ知らないからわかんから何とも言えんが、ただ途中で会っただけなのかもしれん。それが果たして一週間も続くのかと言われれば答えはNOなのだが、どうも俺はただの勘違いなのだろうと思わざるを得なかった。

「おかしいな、なんだか嫌な予感がしてくる」

思わず下がった眉と力の入った眉間を揉んで人知れず憂鬱になった。暴投手とスイーツは学校では前と同じように会話が少ししかない……。一緒に登校するような仲なのに、だ。

そこまで考えた時、例の培われた第六感がズキリと主張を始めた。気づきたくなかった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2840x/>

物語は進まない(仮)

2011年12月2日18時56分発行